

B「名と文学―言葉を享受するとは―」  
12070

## 一、文学とジャーナリズムについて

文学の役割とは何か。

「アフリカで子どもが飢えているとき文学に何ができるか」と問うたのはサルトルである。この言葉の前提は、文学が対象を描き出すものであり、「飢え」という非日常は日常を生きる私たちによって享受されることを待っているということである。事実、先の問いかけを契機として開かれたシンポジウムでは、文学はアフリカで子供が飢えているまさにその現実を私たちに伝えることができる、だから無力ではないという応答があった。

アラブ文学者である岡真理は、この答えをにわかに首肯しがたいと言う。なぜなら、例外的状況では人々の生きる生の内実が文学作品として結晶化し世界に届けられるまでには時間的な距離があるからだ。

現に占領下のヨルダン川西岸地区に暮らす作家のリヤーナ・バドルは「人はつねに作家でいるわけにはいかない。このような状況下では小説家であることをやめ、ジャーナリストたらざるを得ない。」と語り、ペンをヴィデオ・カメラに持ちかえて、パレスチナの現況を直接、世界に発信すべく映像作家に転身している。「今、ここ」の現実を世界に知らしむという意味ではむしろジャーナリズムの仕事であって、生きのびること、日常生活を維持することそれ自体が闘いと同義であるような生を強いられる「今、ここ」の過酷な現実のなかで、文学は依然、無力であると言わざるを得ない。

〔岡真理『棗椰子の木陰で』より「棗椰子の木陰の文学」p.8-9〕

岡はここで、ジャーナリズムに一点の注意を付す。ジャーナリズムが描出する例外的状況は、個別性を剥奪され、ステレオタイプ化するというのである。たとえば、瓦礫の山の傍らで泣き叫ぶスカーフを被った伝統衣装の女性は、パレスチナにおける家屋破壊という出来事を伝えるが、ここでは「瓦礫」が「破壊された家」を、「スカーフと伝統衣装」が「パレスチナ」を表す記号となっており、それは記号であるが故に瓦礫がどの家であるか、女性が誰であるかは問題とならないのである。こうした映像によって伝えられるのは、陳腐化され無化された出来事だ。

ジャーナリズムは戦争といった問題が起きてのちはじめて、それらの問題が生起する社会について伝える。だが、大切なのは、そうした出来事すべてに先立って、人々がどのようにしてその生を営んできたか、何を愛し、何を慈しみ、何を大切にして生きてきたか、そうした生の具体的な細部ではないだろうか。それを知らなければ、私たちは、戦争や占領が彼、彼女らからいったい何を奪い、何を破壊したのかを真に知ることもできない。

（同右、p.12-13）

そして、そのように彼女らの生の具体的細部を知らないままに唱えられる「反戦」や「平和」は、それがどれだけ正しくても、私たちにとっては抽象的な御題目に留まってしまうことを忠告する。

とどのつまり、冒頭のサルトルの問いに対する岡の答えは、私たちが例外的な状況を見るときにステレオタイプ化を防ぎ、具体的な生の細部に共感することで、「反戦」や「平和」という御題目を具体的にするということだ。

ステレオタイプ論という文脈の中で、文学の役割を考えるならば、岡の論理は正しいだろう。サルトルの問いかけの中に見え隠れするオリエンタリズムもしくはエスノセントリズムは、たとえば第三世界の人々を私たちが異質な他者として理解してしまうことに深く関わっている。異質な他者がジャーナリズムによってのみ取り扱われ、異質な他者として記号化されるならば、彼女らはいつまでも私たちにとって異質な他者のまま、再生産されてしまう。

ただ、岡の論を私がいまひとつ首肯しがたいのは、岡が文学に対して無垢な信頼を寄せているからである。つまり言葉が私たちと他者、さらに言えば我と汝を結ぶものとしてどこまで有効であるかという問いが抜け落ちたまま、言葉やそれによってなされる文学が現実の具体的な細部を描き出し、それに私たちが人間的想像力をもって共感することができるという暗黙の了解をなしているのである。

このような問題意識の下で、たとえばサルタンという存在はどのように考えられるだろうか。権力構造の中で外部から規定されてしまうサルタンについて、彼女らが語ることができるかという問いをたてたのはガヤトリ・C・スピヴァクである。

この奇妙なことにも否認の言葉によって「知識人の」透明性のなかにいっしよに縫いこまれてしまっている主体／主体は、労働の国際的分業の搾取者の側に属している。現代のフランス知識人たちには、ヨーロッパの他者の名指されることのない主体のうちにとどのような種類の権力と欲望がやどっているかを想像することは不可能なのだ。

(ガヤトリ・C・スピヴァク『サルタンは語る』p. 28)

スピヴァクが指摘するところは、フランスポスト構造主義の重要な役割の二点目としてあげられた、知識人が社会の他者の言説を明るみに出すことに対する否定である。つまり外部からの規定を免れないサルタンの存在を私たちが想像することは本源的には不可能であるという示唆である。

## 二、石原吉郎の戦後体験

ここで、日本におけるサルタンの存在といえるかもしれない人物について、考察し

てみたい。戦後八年のシベリヤ抑留を経験した後、スターリン特赦によって帰国した詩人石原吉郎である。戦後の日本、殊に朝鮮特需のただ中であって石原をはじめとした抑留経験者の存在はどのようにして受け入れられたのか。

日本に帰ってきた直後は、たくさんの方が自分の内部にうっ積して、凝縮した状態にあったわけです。それを散文的な形、あるいは日常のことばの次元でとき放つことができなかったわけですね。それは、実際に人に話してみてもわかったことですから、ほとんど理解してもらえない。ということが別の切迫したことばの次元、詩という形式を選ばせたということに、強いて説明すればなるかもしれません。

(石原吉郎『望郷と海』より「沈黙するための言葉」p.129)

そんななか、戦後体験は戦後復興という国民的な物語に矛盾しない限りにおいて受け入れられ、顕彰された。しかし、文字通り戦争の傷口を癒やしつづけた戦後日本にとって、石原らのシベリアからの帰還者たちが持ち帰った体験は前章で見たように、傷を再び悪化させかねない不都合な真実でしかなかった。

(五十嵐恵邦『敗戦と戦後のあいだ』p.127-128)

戦後の日本におけるそうした例外的な体験者の記憶というのは、「荒廃から復興へ」という国民的物語の前ではほとんど無力であった。数という圧倒的な権力と対面して、シベリヤ抑留体験は外部からの圧力によって、語られないまま、少なくとも人間的想像力によって共感されるような対象とはならなかったのである。

石原を詩文学へと導いたのはこうした孤独である。そうしてそれは、同時に眼前に広がる進歩への志向ではなく、シベリヤという人間的な根源を問われ続けた位置へと、石原を導くものでもあった。

しずかな肩には

声だけがならぶのでない

声より近く

敵がならぶのだ

勇敢な男たちが目指す位置は

その右でも おそらく

そのひだりでもない

無防備の空がついに撓み

正午の弓となる位置で

君は呼吸し

かつ挨拶せよ

君の位置からの　それが  
最もすぐれた姿勢である

(石原吉郎『サンチョパンサの帰郷』より「位置」、『現代詩文庫 26 石原吉郎』p.10)

石原の第一詩集『サンチョパンサの帰郷』の冒頭に置かれた詩「位置」である。ここに登場する「敵」という発想は、石原が収容所で出会った鹿野武一の発言がもとになっている。鹿野はレジスタンス容疑で取調べを受け、いっこうに態度を曲げない鹿野に取調官が根負けして放った「人間的に話そう」という発言に対して以下のように答えている。

鹿野はこれにたいして「もしもあなたが人間であるなら、私は人間ではない。もし私が人間であるなら、あなたは人間ではない。」と答えている。

(『望郷へ海』より「ペンハーストの勇氣にこころ」 p.27-28)

以上をうけて詩人の笹原常与は、石原がシベリヤに求めているものを、人間が私と他者とに分断される前の姿であるとする。(『現代詩文庫 26 石原吉郎』『石原吉郎書附け』)先ほど引用した詩「位置」における「声だけのならぶしずかな肩」のイメージはこの点において語ることができるだろう。その「しずかな肩」を分断するのは「無防備の空がついに撓み／正午の弓となる位置」であって、その位置にあつては共感という営みの俎上にあげられてどれだけの言葉を尽くされようと、シベリヤを経験した石原の姿はついには正確に語られないのである。

「勇敢な男たちが目指す位置」、「その右でも　おそらく／そのひだりでもない」ほど正確に語られるその位置とはいったいどんなのか。石原が志向した「位置」は、まさしくシベリヤ抑留という経験がまったくそのままに語ることのできる位置、つまりはシベリヤという過去であり、人間が人間に分かれてしまう前の、対峙を要しない共同性である。石原の詩はしばしば難解とされ、彼自身「詩を書くことによって終局的にかくしぬこうとするもの、それが本当は詩にとって一番大事なものではないか。」(同右「沈黙するための言葉」p.132)としている。つまり彼が詩によってしたたかくしぬこうとしたものこそ、彼がシベリヤにおいて経験した生の具体的細部であった。それが、かくされなくてはならないということはすなわち、平時を生きる日本人がそれをそのままに受け入れようとはしない、少なくとも岡の言うような具体的な生の共感の対象として石原を見ていないということがあったのだ。この点において、文学はスピヴァクの指摘通り権力構造と恣意のなかに組み込まれているのである。

また、石原が目指した共同性が人間が人間に分かれる前である点にも注意したい。岡が想定する共感、それは異質な他者を私たちの側から解釈することであった。仮に文学が私たちとは異質な彼女の生の具体的な細部を描き出し、それを私たちが人間的想像力をもって共感の対象とすることができたとしても、それが彼女らの実感を私たちが理解した

ことになるのだろうか。それがおよそ不可能であるような現実を私たちは考えなくてはならない。

たとえば先の鹿野武一の例がある。彼が取調べを受ける原因となった出来事、一人絶食をし、誰もが避けようとする苦行を自ら進んで引き受けに行った彼の一目おかしな行為の理由である。

メーデー前日の四月三十日、鹿野は、他の日本人受刑者とともに、「文化と休息の公園」の清掃と補修作業にかり出された。たまたま通り合わせたハバロフスク市長の令嬢がこれを見てひどく心を打たれ、すぐさま自宅から食物を取り寄せて、一人一人に自分で手渡ししたというのである。鹿野もその一人であった。そのときの鹿野にとつて、このような環境で、人間のすこやかなあたたかさに出会うくらいおそろしいことはなかったにちがいない。鹿野にとつては、ほとんど致命的な衝撃であったといえる。そのときから鹿野は、ほとんど生きる意志を喪失した。

(同右、p.27)

ここでのハバロフスク市長令嬢の行為は、平時に生きる私たちにとってみれば、およそ人間的で倫理的なものであった。事実、彼女もそのような判断に基づいて、少なくとも受刑者たちを痛めつけるような意志ではなく、純粹な慈悲によってその行為を行っただろう。しかし結果として鹿野は傷つき、生きる意志さえ失ったのである。優しさが一人の人間を殺しかけたことは決して看過すべきではない。

ここに示されているのは、先のスピヴァクの話にも通じるような、人間的想像力の限界である。私たちが他者、それも異質な他者に向かい合ったとき、その間をつなぐ言葉にどれほどの忖意が、言い換えればこちらの権力が含まれているのか。両者が対等に向かい合える場ならその忖意も意思疎通のなかで最小限になるかもしれないが、それが一方的になるとき、文学としてただ読まれるだけのとき、どこまでも肥大しうる忖意を止めるものはいには存在しないだろう。

想像力の恐ろしさはまさしくここにある。岡の論理において御題目に具体性を与えるはずの想像力は、私たちに経験や実感が欠如しているからこそ自由に飛躍し、最後には文学によって描出された対象すらも傷つけてしまうかもしれないのだ。文学にその皮肉のような出来事を止めることができるのだろうか。

### 三、文学の役割を再考する

では言葉を享受するとは、それによってなされる文学を享受するとは、いったい何なのだろうか。それは少なくとも、言葉への無垢な信頼に基づいて、描かれた生の具体的細部に思いを寄せるということだけではないだろう。その前提条件となる言葉と文学の本源的

な在り方、見る側である私たちの権力と恣意が絡みついたそれらをどこかで精算しなくてはならない。

それを行うために岡と石原に共通するものを考えてみたい。それは岡の言葉を借りて言えば「生の具体的細部」である。

私がこの話を聞いたときに考えたのは、死にさいして、最後にいかんともしがたく人間に残されるのは、彼が、その死の瞬間まで存在したことを、誰かに確認させたいという希求であり、同時にそれは、彼が結局は彼として、死んだということを確認させたという衝動ではないかということであった。

(同右より「確認されない死のなかで」p.3)

「この話」とは詩人嵯峨信之が映画「みじかくも美しく燃え」のラストシーンについて、心中を決意した男女が最後に出会った見知らぬ男に名前を尋ねられ答える、というのを述べたことだ。岡の言う「生の具体的細部」とは石原の言うところの「彼が彼として死んだ」こと、裏を返せば「彼が死ぬその瞬間まで彼として生きた」ということである。

ここで重要なのは、死に際して他者からの共感を要するということではない。むしろ人生の最期の瞬間に他者から峻別されるということである。このときの名は単なる峻別記号であっても、彼の具体的な生を他者が確認する手段、彼の生を一挙に負ったものとなるのである。思うに、文学が役割を負うことのできる点は、おおよそここよりほか無いのではないか。つまり、対象を描き、見る側の想像力に訴えかけるのではなく、見る側に対象の存在を確認させるものなのではないか、ということだ。仮に共感の対象として語られるとしても、そのような前提がなければ、対象は権力や恣意の構造のなかで私たちの延長線上の存在として終始するだろう。

そこにあるものは

そこにそうして

あるものだ

見ろ

手がある

足がある

うすわらいさえしている

見たものは

見たといえ

けたたましく

コップを踏みつぶし

ドアをおしあけては

足ばやに消えて行く 無数の

屈辱の背なかのうえへ

びったりおかれた

厚い手のひら

どこへ逃げていくのだ

やつらがひとりのこらず

消えてなくなっても

そこにある

そこにそうしてある

罰を忘れられた罪人のように

見ろ

足がある

手がある

そうして

うすわらいまでしている

(『サンチョパンサの帰郷』より「事実」『現代詩文庫 26 石原吉郎』p.12)

この詩はそうした態度の必要性をありありと示している。うすわらいをうかべた気味の悪い他者が、そのままの他者であり得るような態度、それがなければ事実は「ドアをおしあけては／足ばやに消えて行く 無数の／屈辱」となり、私たちの認知の埒外になってしまうだろう。

ここにおいて、文学は単に享受する側のみの営為から飛躍する。名を呼ぶという確認の行為は、異質な他者をそれとして認めるが、一方でサバルタンの存在はここで初めてサバルタンとして立ち上がる。私たちの権力がゆがめない真の実存が立ち現れるのである。先に挙げた石原の「位置」の後半、「君は呼吸し／かつ挨拶せよ／君の位置からの それが／最もすぐれた姿勢である」とはこの文学の態度を示している。「呼吸」という生の営みが並列されているのは「挨拶」というひどく儀式的なイメージであり、「見たものは／見たといえ」という命令と同義だ。そうした、儀式として行われるような、形式的な行為さえ存在しないのが、少なくとも彼の置かれた時代状況であり、それは現在においても同様であろう。

冒頭の問い「アフリカで子どもが飢えているとき文学に何ができるか」という問いに対する一つの答えとして、岡は「描出される他者のステレオタイプ化を防ぐこと」を挙げた。それに対して、石原を考察することで見えた答えは「異質な他者をそのままに享受するための態度として、名を呼び、確認する」ということであった。これは、例外的な日常を描くときのみ言われるべきことではない。むしろ他者が他者として生きるかぎり、日常は誰においても唯一の例外となる。だからこそ「文学の役割とは」という問いが考えられな



くてはならない。それは「他者を他者のまま描き出し享受させること」であり、ここにおいて、言葉を言葉のまま、他者を他者のまま享受するための態度が、私たちに突きつけられているのではないだろうか。

#### 参考文献

- ・岡真理『褒椰子の木陰で 第三世界フェミニズムと文学の力』、青土社、二〇〇六年より「褒椰子の木陰の文学」、二〇〇四年初出
- ・ガヤトリ・C・スピヴァク『サバルタンは語ることができるか』、上村忠男訳、みすず書房、一九九八年
- ・石原吉郎『望郷と海』、みすず書房、二〇一二年
- ・五十嵐恵邦『敗戦と戦後のあいだで 遅れて帰りし者たち』、筑摩書房、二〇一二年
- ・石原吉郎『現代詩文庫 26 石原吉郎』、思潮社、一九六九年